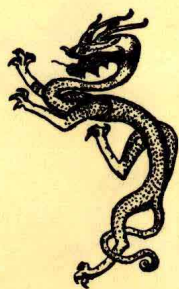


私の作家評伝 Ⅲ

— 子規・続漱石・鏡花・秋江・浩二 —

小島信夫



新潮選書

あるときには自分にとって思いがけない作家をとりあげるというのが、私のやり方だ。なるべく大きく迂回してみたい、自分を自由してみたいと思うからだ。見ず知らずの作家もおつきあいさせていただくうちに、気脈が通じてきたらしいと感じだすのが楽しみでもある。

こんなふうにしていつまでも続けたいと思うので、どうか読者も息長くおつきあい願いたい。 著者

Ⅲ

江 浩二

小島信夫

新潮選書

私の作家評伝 III

〈新潮選書〉

——子規・続漱石・鏡花・秋江・浩二——



© Nobuo Kojima, Printed in Japan, 1975

昭和五十年四月二十日 印刷
昭和五十年四月二十五日 発行

定価 七八〇円

著者 小島信夫 こじま のぶ お

発行者 佐藤亮一

印刷 株式会社 三秀舎

製本 大日製本株式会社

発行所 162 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新潮社

電話 業務部(03)二六六一五一一
編集部(03)二六六一五四一一
振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

もくじ

闇汁／正岡子規 5

多佳女の約束／続夏目漱石 43

神をよぶ姿／泉鏡花 69

同じ川岸／近松秋江 105

ひとおどり／宇野浩二 139

あとがき 246

索引 260

插画・坪内節太郎

私の作家評伝 Ⅲ

——子規・続漱石・

鏡花・秋江・浩二——

闇汁／正岡子規

正岡子規

- 慶応3年 陰暦9月17日、四国松山藩御馬廻加番、正岡隼太の長男処之助（後に升）として生る
- 明治13年 松山中学入学
- ＊ 16年 松山中学中退、上京する
 - ＊ 17年 随筆「筆まかせ」を書き始め25年に及ぶ
 - ＊ 18年 学年試験に落第、陸羯南と交る
 - ＊ 20年 俳句の師、大原其茂を得る、この頃、野球に熱中
 - ＊ 22年 5月、咯血、子規と号す、「啼血始末」「水戸紀行」
 - ＊ 23年 文科大学国文科に入学
 - ＊ 24年 房総を行脚する、「かくれ蓑」「隠蓑日記」、この年より「俳句分類」に着手
 - ＊ 25年 小説「月の都」、露伴に見せたが不評、俳句に没頭、学年試験落第の為、中退、12月、日本新聞に入社、「癡祭書屋俳話」
 - ＊ 26年 俳句時評にて、旧派の月並俳諧を批判す、「寒山落木」（巻二、2995句）、「芭蕉雑談」

- 明治27年 「小日本」創刊、写生論「地画的觀念と絵画的觀念」
- ＊ 28年 周囲の反対をおして従軍、休戦協定の為、一ヶ月で帰る途中咯血、重体となる、松山にて漱石の下宿に移り、俳会開く、12月、虚子に道灌山で後継を頼むがことわられる
 - ＊ 29年 腰部疼痛の為、歩行困難となる、「三十棒」「我が俳句」
 - ＊ 30年 「ホトゝギス」松山にて創刊、「病床苦吟」、「古白遺稿」出版
 - ＊ 31年 和歌革新にのり出す、「歌よみに与ふる書」
 - ＊ 32年 「俳諧大要」「蘭汁図解」
 - ＊ 33年 「叙事文」発表、写生文を主張した、「竹里歌話」、「寒玉集」
 - ＊ 34年 「墨汁一滴」（日本新聞連載）、「仰臥漫録」、10月、精神錯乱を起す
 - ＊ 35年 「病床六尺」（日本新聞連載）、127 が最終稿となる、9月19日没す

漱石の書簡集をひろげて見ると、最初の五、六年の間は子規へあてたものに限られている。十通ぐらいもあろうか。ところが当時の子規の書簡集の場合、漱石あてのものは、ほんの一部である。子規が自分よりさきに松山から上京している友人にあてたものやら、二人のオジにあてたものやら、そのほか上京後、友人・後輩にあてたものの中に隠れてしまいうのである。

これは、誰でも知っていることであるが、実質は別のことであつて、その証拠には当時子規が書いていた草稿の一つ『筆まかせ』（明治十七年から二十五年までの、随筆ふう、ノートふうのもの）の中に、わざわざ何組かの漱石と自分の往復書簡を書きぬいて見せ、それに面白おかしく注釈も施し、彼独特の、悦に入つたようなまとめ方をしている。つまり自分達の書簡を材料にして、ちょっとした作品の体裁をとらせているのである。何かそこには子規生得のものがほの見えている。このこと自体にユニークなものがある。これからも繰返して出てくるところの子規のおどけた戯作調の態度もそこにあることは事実だが、もっと大切な態度がそこにある。

明治二十二年の四月に子規は友人を訪ねがてら水戸方面へ旅行をして那珂川を下る舟の中でおこりを感じた。喀血の前ぶれのようなものだったらしい。二十六日、彼は「悟り」という題

の面白い演説を、寄宿舎で行なった。この寄宿舎は本郷真砂町の渡辺一夫先生の隣りに当るところで、松山藩主の久松家が同郷出身の書生のために開放したもので、子規は久松家から七円の奨学金をもらい、ここに入れて貰っていた。演説「悟り」とは、寄宿舎にいる友人たちの「悟り」をめぐる意見や生活を中心にしたもので、そんなことを話題にしたあと餅菓子と焼きいもなどをやたらに食い、「今夜は遺精をやりそうだ」などと話しながら寝たところ、やはり明方に精液をもらした。

朝起きて学校へ行こうとすると、何やら心に異常を呈し、もう生死のことなど考えないようになっていた。学校に行っても、いつものように苦しいとも思わなかったが、十時頃下校したときには、いくらかネジが戻り、煩惱も再発しかかり、午後向島へ行き、浅草など歩く時分には、もとの状態になり、浮世の中にあつた。この演説には特に結論はないが、みんなの知っている学生が登場するし、恐らく喝采を博したものであろう。

結核による彼の咯血は、そのあと五月九日の夜おこつた。前年に二度血を吐いているから、これで三度目である。五月十三日漱石は子規に手紙を送り、入院をすすめ元気づけ、和三郎兄がやはり病床にあると述べている。血をはくところから、こう時鳥が^{ほととぎす}多くてはさすが風流人の自分も閉口の外なし、と書き添えている。これが漱石書簡の第一である。

子規はこのとき時鳥の俳句を四、五十作ったり、漱石は女の子の泣かぬよう養生せよ、とふざけながらいたわっている。

子規は、七月、この年開通した東海道線を利用して帰省し、九月、『啼血始末』という不思議な文章を書いている。

判事、闇魔大王。立会検事、牛頭赤鬼。同、馬頭青鬼。それに被告の子規が登場している。

《判事闇魔大王「今日より其方被告の病氣に付取り調べをするから本官及び檢察官の間に応じて逐一に答へよ。尤其方は読書したこともあり且つ哲学などと生意気にひねくる者と聞きし故、人を欺く様なこともあるまいが、念のため言ひきかすから其心得で居るがよからう。

被告子規生「承知致しました。

判事「其方の姓名は。

被告「以前は蒲柳病夫と申したこともありましたが今日ではそれは用ゐず、専ら子規生といふ名を用ゐます。又字の様に子規と書くこともあります。又ある友だちが都子規とつけてくれました。

検事赤鬼「被告は丈鬼といふ名もあるよし聞きしが、これは本官の名と似てゐるが何か関係のあることか。

被告「これは鬼貫から取りましたものでございます。御疑のすちなれば鬼貫へ御尋ねを願ひます。》

といった調子で始まる。原稿用紙で三、四十枚ぐらいのものであろうか。十年だけしか寿命をやるわけには行かぬと宣告が下るのに対し、貧困のせいだと反論すると、その方、すぐに金、金というが、金があったとして何もかも自由になるものではない、といわれ、閉廷となる。じっ

さいには、子規は、この後十二年ばかり生きることになるが、そういうことは別として、それまでこのような組立てで誰が自分の病氣のことを書いたであろうか。

この「始末」にも要するに始末が書かれているのであって、それ以上の結論は内容的にはない。自分という一個の人間が喀血したということはどういう現象であるか、ということ、自分という人間は子規（ほととぎす）という一個の名前をもった人間であるということ、喀血から子規と名づけ自分を元気づけたことが、客観的にはどういうことをあらわしているのか、ということ、それら諸々のことは、つまり天地自然の中で自分の位置づけをしようとしているかのように見える。

明治二十二年（二十二歳）に書かれたこの『啼血始末』は、いうまでもなく素朴なものではあるが、直哉が書いた『范の犯罪』や、横光の『マルクスの審判』をちょっと考えさせる。

さて、『筆まかせ』の中にある、漱石との往復書簡は、明治二十二年の八月三日付からはじまっているが、そのあと翌二十三年の正月頃のが中心をなしている。

漱石は、『啼血始末』を書いたあと上京し、不忍池あたりに下宿をうつしてそこで書いた、子規の『水戸紀行』を読んでいたと見えて、その和文体がなよなよしている、とか、手習いばかりするのではなくて ideas そのものが問題だ。お前さんは病人であるのだから、それを責めるのは酷なようだが、手習いなんかやめて、その余暇でもって knowledge をつけたらどうですか。こういうと、こっちのことを例によって冷笑しながら「馬鹿な奴だ」といわなかね、兎角、御前の coldness に恐入りやす、とふざけた口ぶりで結んだりもしている。

これに対して子規が返事をやったと見えるが、それは残っていない。そのあと漱石がよこし

た長い横文字のいっぱい入った手紙は、要するに「idea」、つまり、あとでよく漱石の使う趣向が問題で、レトリックが之に加ったときに一番いい文章になるのだ、というふうにいい、この二つのもの（アイデアとレトリック）の組合せを六つあげている。こういうやり方は、あとあとの漱石の意見とも同じであるし、そうした分析の仕方は、やがて「文学論」にも発展するものである。そうではあるが、何だか子規のお株を奪ったみたいで、この手紙を受取った子規は苦笑したかもしれない。しかし子規はレトリックとアイデアとの二つを比較するのは論理学的に間違っている、とわざと漢文に英語をまぜて書いている。

二人のやりとりは茶かし合うことが多くて、あるときは子規は漱石を「旦那」と呼び、漱石は子規を「妾^{めかけ}どのへ」と書いていることもある。威勢のいいところを子規に見せて、お前は女らしいと思うかと思うと、女義太夫に芸のいいのがいてきれいに見えた、と漱石はいつてやる。子規は芸か女そのものかどっちが先きか分るものか、といいかえす。

このときの二人の関係は、一口にいえば、子規が和文の手習いをしている一方、漱石は西洋文学をもとにした趣向を勉強している、ということになる。しかし、それは一応はそうだが、表向きのことであって、それがそう簡単にいいきれぬのなら問題はない。漱石自身がまだ何もこれといった散文の文章を書いていたわけではなかったからである。

この年（明治二十三年）の七月に漱石の手紙が田舎にいる子規のところへきた。この中には浮世がいやになったといったふうのことを、メンメンと書きつらねてある。何の因果か女の祟^{たた}りで、この頃は持病の眼が悪くて読書も出来ず、したがって九月に会っても、お前さんを驚かすほど勉強していないから安心せよ、その代りよく睡眠をとるから、夢の中に美人を見る功德も

ある、という。八月九日付の手紙の中には『方丈記』の英訳の文章も入っている。こういう愚痴っぽい手紙はお前さんにやったのは始めてだから、苦い顔をせずに読め、ともつけ加えている。

女々しいといえば、漱石のこの手紙は子規の方からすると、いい餌をあたえられたことになる。漱石の方も餌を与えるつもりもいくらなかったわけではない。男同士の青年のなれあいというものは、男女の間柄よりも甘いくらいのものである。

ところが、これに対して子規は当然のことながら、

「何だと女の祟りで眼が悪くなつたと、笑はしやがァらァ」

とやつつける。こういうことになる子規の独壇場だから、得意の易でうらなつて見たところ、とくる。君は、眼疾を粹病と間違えて女にいいより、女にかまれてケガをすると出た、と実に上手に、いつてやる。そのうまさは短かいスペースでは披露することは出来ない。江戸っ子の向うを張って、しかも粘りつくく、その諷刺的きどりも、江戸っ子の漱石の比ではない。漱石の手紙もそうであったが、子規の方も俳句やら漢詩やら英文やら総力をあげて野次りとばしている。

女の祟りというのは、非常に一般的にいったものである。青春時代の特定の女のいない若者たちの話にはこうした文句が入ってくる。面白がつた見せびらかしでもある。それに子規のことを「妾」と手紙の中で呼び、「あなた」と子規にふざけたりしたことのある漱石が、子規の祟りで、と面白くいつているのかもしれない。

「女の祟り」といういい方は、俳句や何かで狂女を扱うのと同じように、何となくよくつかつ

たいい方で、当時の男ぶった男たちがつコンプレックスからの発想だったかもしれない。

私は第一巻に「漱石」のことを書いたさいに、漱石が、頭の状態がおかしくなったときに、「女に氣をつけるー」とどなったということを書いたおぼえがあるが、このユウウツがつている当時の漱石はいくらか頭がおかしかったかも知らない。だいたい眼病というのが、もともと明治二十一年の初めにかかったトラホームというのがもとで、ずっと治っていないらしかった。このトラホームというのにしても、自律神経失調症からきたものであったかもしれない。いずれにせよ、こういう手紙や小説にはおかしいところが少しもあらわれないんだから、勝手に推測するだけのことだ。だから「女の祟り」というのも案外、誰にも分らぬ暗示的意味合いがなかったとはいえない。

とにかくそれはそれとして、表面上は「女」をもってきたりして、ユウウツな状態を披瀝したのだが、子規の方も上京してから、たえず脳の具合が悪いと訴えている。どうして、こう脳の具合が皆悪いのだろう。悪いというのだろう。

この往復書簡のタイトルとして、子規は「鬼の目に涙」とつけて編集している。鬼とは自分のことであろう。級友の中で漱石は、眼疾のためか、夏目という苗字のためか、その眼つきのためか（このことも十分に考えられる。私が第一巻で漱石のことを書いた文章の中の「漱石の眼つき」のことを読み直して貰いたい）、the Eyes（目）というアダ名を貰っている。これに對して子規は the Cold というアダ名だ。冷血漢とでもいうつもりであろうか。『筆まかせ』の中でアダ名一覧表を子規はノートしている（こうしたことについては後で述べることにしよう）。夏目の目にも悲しいユウウツの世をはかなんだ涙がうかんでいるが、それを読んで冷血

漢も思わずホロリとさせられた、というふうの二つのことをかけているととった方がよからう。いづれにせよ、そのレトリックはしたたかなもので、その逞しさにかけては漱石の比ではない。漱石は例によって煙にまかれ、あきれたに違いない。

漱石はその返事に、「女祟の攻撃昼寝の反対奇妙く然し滑稽の境を超えて悪口となりおどけの旨を損して冷評となつては面白からず」といってやるが、けっきょく、そのあとに漢詩をつけ足して、一人は嗜血するし、一人は愚劣なことをいう。きみの病氣は治るがこっちは治らん、といったぐあいのことを述べてさようならをしている。

その返事に子規は漱石を笑わせてやろうと思つて一生懸命に書いたのが、きみの忿怒を買つたとは恐れ入った、と大ゲサにいう。そして漢詩と俳句をのせ、御一笑に候。俗世界へ手紙を出すことは先ずこれにておしまい。と書いたあと、子規は琵琶湖いきたいの旅行へと出かける。たった一度の甘えを子規がこぞとばかりやつつけた。こういう弱音を子規が吐かなかつたわけではない。ただ青年のこうした鬱病状態の中で訴えたりはしなかった。

私はこう書いてきたが、「女の祟り」については、表面はふざけているが、具体的に彼を悩ます事件が起つた、という想像もされないことはない。そうとすれば勿論、彼の多くの小説、とくに晩年の『明暗』の清子のように、自分の意志をハッキリ伝えぬがために恨みを抱いて去つて行つた女が、こちらにあたえる心理的いたみ、のようなもの、というふうにもとれぬことはない。その場合も漱石の病的ともいえる想像力が働いていたことには変りがないと思う。この文章が出来あがってから気づいたことだが、『虞美人草』の第九章に「紫が祟つたからであ